

打って反省、打たれて感謝

山梨県

山城剣友会

小学6年 野村将聖

「打って反省、打たれて感謝」

この言葉は、僕を成長させてくれる大切な言葉の一つだ。

僕が剣道と出会ったのは小学3年生の夏だ。きっかけは、学童から近いといった極単純なものだった。しかし、何の気なしに体育館に足をふみ入れた瞬間、大きな気合と竹刀の音、がむしゃらに打ち込む剣士の姿に、僕はくぎづけとなっていた。

まばたきをすることも忘れ、稽古の様子に見入っていた僕に、先生が優しく声をかけてくれた。

「かっこいいだろう。君も剣道をやってみないか、楽しいぞ。」

その温かな言葉に吸い込まれるように、いつの間にか僕は皆と一緒に竹刀を振っていた。

しかし、竹刀を振り始めた頃の僕は、ただ皆と一緒にいることが楽しくて、剣道を通じて何かを学ぶという考えなど全くなかった。ただ漠然と稽古をし、試合で負けても、その結果だけにとらわれ、一喜一憂していたのだ。

そんな僕に、ある日先生がこう言った。

「おい野村、打って反省、打たれて感謝だぞ。」

その言葉を聞いた時、僕は「何で打ったのに反省するんだろう、打たれたら悔しいだけじゃないか。」と思ったのをよく覚えている。正直言って、その時の僕は剣道をただの勝ち負けとしての競技としかみていなかったのだ。

そんな僕の考えは自然と結果に表れ、勝てない日が続いた。そして、周りの仲間がどんどん強くなっていく中、自分だけが取り残されている気がし、自分と他人を比べ、焦っていた。その時、僕の頭の中に、あの時先生が言った言葉がよみがえった。

「打って反省、打たれて感謝」

その言葉の意味を真剣に考えた時、先生が伝えたかった「剣を通じて学ぶ反省と感謝の意味」が少しだけ分かった気がした。

剣道は相手がいるから出来る武道だ。その相手が自分の良い所や悪い所を教えてくれる。目の前にいる相手は言葉に出さずとも、剣を交えることで僕を成長させてくれているのだと。

そう、僕に足りなかったのは、反省と感謝の心だったのだ。

それに気付いた時、それまで目の前の相手しか見ていなかった視野を少しだけ広げることができた。

すると、そこには共に頑張っている仲間や、応援してくれる保護者の姿があることに気付けたのだ。

辛い稽古でくじけそうになった時、試合で負けて落ち込んでいる時、いつも仲間が励ましてくれていた。僕が身につけている防具、握っている竹刀、それらは両親が働いて買ってくれたもの

だった。試合や遠征、日々の稽古、どんなに忙しくても笑顔で送り出してくれる両親がいた。

それなのに、僕はそんな大切なことに気付かず、たった一人でやっている気になっていたのだ。

そのことに気付いてから、僕の意識はおのずと変わっていった。

剣道ができる環境、支えてくれる仲間、応援してくれる両親、そして剣道を通じて人の道を示してくれる先生、自分を取り巻くありとあらゆる人達に感謝をし、日々の稽古を大切にしながら自分自身を見直すようになった。

それから約一年が経つ。

しかし、今の僕はまだ自分の思い描く剣士にはなれていない、だから、僕は先生が教えてくれたあの言葉を胸に、今日も稽古に励んでいる。

剣を通じて、人間として成長するために。

この一太刀で得る反省と感謝をかみしめながら。